

2013年8月号・季刊41号

# ミンダナオの風

執筆編集\*松居友/松居陽/大野民希 発行:ミンダナオ子ども図書館



今季刊誌でも連載になっている、野菜売りの子どもたちを

ビデオカメラで追って、もう長くなる。

年頃になって、

野菜売りに行きたがらない

お姉ちゃんのギンギン、

ケンカでは男の子にも負けない、

暴れん坊のクリスティン、

泣き虫で、

甘えん坊のジョイジョイを中心に

撮っている。

特にクリスティンは、

僕(松居陽)になついてしまい

(というか、僕をいじめるのが好きで)、

今回の作品も、

ドキュメンタリーというよりは、

ホームビデオというか、

僕たちのユニークな関係を軸に

ストーリーが展開する。

今回の作品は、MCLの報告会で

日本を周るとき、上映する予定です。

ミンダナオの子どもたちの現実を

少しでも実感していただくことが、

僕(松居陽)の願いです。

苦しさや矛盾だけでなく、

むしろそこにしかない貴重な美しさ、力、

そして人間らしさを感じていただければ幸いです。

Mindano Children's Library Foundation, Inc.  
MCL

SEC REG. NO. CN200315083

前号の号外で、ミンダナオにおける、イスラム地域の和平交渉が、軌道に乗り始めたかと思えたにもかかわらず、再び戦闘が起こり始めたことを書いてた。

その後、ミンダナオ子ども図書館は、すぐにアクションを起こし、現地を調査した後、子どもたちと避難民キャンプにおもむき、読み語りをし、雨よけのビニールシートと医療支援、そして日本から送られてきた古着の支援をした。

それからさらに一ヶ月、戦闘が別のところに拡大、こちらにも避難民支援をしたが、ミンダナオ全域を含む大規模戦争が起こるのではないかという不安に人々の心は動揺した。

しかし、フィリピン政府とモロイスラム解放戦線(MILF)が和平交渉の第二弾として資源交渉の分配に関して合意のサインした結果、少し安堵感が広がったが、それもつかの間、再び同じマタラムで戦闘が国道沿いにまで再度拡大し、これを書き終わった明日から調査に向かわなければならぬ。

そのことは、ウエップサイト(検索「ミンダナオ子ども図書館だより」)で写真付きで掲載したが、その内幕について、今回は連載を延期して少し詳しく触れてみたい。

## ミンダナオ和平・状況報告

松居友

和平交渉が軌道にのって、ミンダナオに本格的な平和がおとずれような感覚におちいつていたこともあって、前号季刊40号で、10周年記念も関連して、連載「なぜミンダナオ子ども図書館を始めたらか」を書き始めたのだけれども、入稿した後にはマタラムで戦闘が起こり「号外」を挿入せざるを得なくなつた。(これがミンダナオの、または世界の現実なのかもしれない・・・)

その後、ミンダナオは、和平を確立させようとする動きと、戦争を起こそうとする二つの勢力の間で動揺しているように見える。今回は、その点について触れてみたい。

前号で号外を出した前後、数カ所の避難民キャンプを調査、ミンダナオ子ども図書館で子どもたちと支援に向かった。



読み語りと避難民救済へMCL

最初に行った場所では、読み語りをして、その後子どもたちが先導して、ビニールシートを渡し、腹痛や風邪の子、皮膚疾患の子たち、また大人たちを対象に薬による医療支援をした(寄付をくださった方、心から感謝します)。

しかし、このとき、本当に悲しいことだったが、前日に現地調査をしたときに病氣だった老人(病院につれていくことを約束したのだが)を、翌日子どもたちと訪ねると、すでに亡くなつており埋葬しているところだった。この時点ですで一ヶ月、彼らは避難民生活をしているのだが、現地に戻ると、夜鉄砲を持った人たちがうろうろして、怖くて帰れないという。



翌日行ってみると、左の老人は亡くなっていた

それからさらに一ヶ月がたつた。ほくたちは、このマタラム地域に3度足を運び別の2カ所で読み語りをし、またビニールシートを届け、医療支援を行い、日本から送られてきた古着を届けたい。

ミンダナオ子ども図書館は、小さなNGOなので大きな支援は出来なだが、大きな機関が入れなかったり見落としていた小さな場所に、常時滞在の現地NGOの長所を發揮して入っているし、とりわけ単に物資を届けるだけではなく、スカラシップを受けている現地の子どもたちが、避難民化している子どもたちに楽しい読み語りをを行うことで、子どもだけではなく、沈んでいる大人たちの心にも、勇気や喜びをあたえることが出来る。



読み語りをする、イスラム(左)とクリスチャン(右)の奨学生



その後、マタラム地域以外に、ピキットの奥のバイドブランギ集落で戦闘が勃発、避難民が出ているという報告が入った。

マタラムは、クリスチャンが比較的多く、平穏でぼくらの住んでいるキダパワン市に近いのだが、ピキットはそのさらに向こうのイスラム地域で、天然ガスが埋蔵されているリグアサン湿原に隣接し、戦争が絶えない。

そのなかでもバイドブランギ集落は、名前の通り大河ブランギの河畔で、モロイスラム解放戦線の中でも過激といわれる分離派、バンサモロ・イスラム自由戦士（B I F F）が活動する場所。大きな戦争が絶えず勃発する地域だ。



すでに一ヶ月、この後も一ヶ月、今も避難民状態の家族たち

このあたりの集落には、MCLでいくつか保育所を建てているし、近くのブアラン集落には日本政府のODAと協力して小学校も建設、多くのスカラー（奨学生）も採用している。それだけに、心配になり、独自に調査を開始、さっそく子どもたちと支援に向かった。

驚愕したのは、現地で読み語りをしているときに入ってきた情報だった。

「戦闘の起こっている船着き場に、海軍の戦闘用ボートが着いた。本格的な戦争に拡大するかもしれない。読み語りがすんだらなるべく早く退去したほうが良い……」



MCLの子どもたちと、ビニールシートを張る、日本からのボランティアの若者

このイスラム地域での戦闘の勃発原因は、バイドブランギ集落に駐留している国軍（フィリピン政府軍）の戦闘用プロペラボートが、モロイスラム解放戦線（M I L F）との協定で制定した境界線を越境したことに起因すると現地では聞いた。このプロペラ船は、オーストラリア政府から寄贈されたもので、MCLでも洪水被害が激しいときに乗って支援をしたこともある。

政府軍の船が、協定で決めた境界を越境したので、反政府軍から攻撃され、沈められ、数人の兵士が殺され、反政府側にも死者が出たという。境界線を越えれば攻撃を受けるという事は知っていたわけ、越境した理由は明白ではない。しかし、それをきっかけに、政府軍がこの地域に大量に派遣され戦闘が勃発。避難民が出た。

そこで、MCLで支援に向かったのだが、そのときさらに、海に近いコタバト市から海軍の戦闘用ボートが大河



かなりの国軍が投入され戦闘に向かう

をさかのぼり、バイドブランギに着いた、という情報がはいった。単なる軍ではなく、海軍が投入されたということ、現地では、本格的な戦争に突入する兆候と言われている。

2000年初頭の百万を越す悲惨な戦争も、海軍が戦闘用ボートでコタバト市からブランギ河をさかのぼり、一斉射撃を加えながら、ピキットの郊外の河岸に上陸したところから本格化した。

そうした過去の経験から、今回の海軍戦闘用ボート上陸のニュースは、非常な緊張をミンダナオに流した。反政府組織は、和平交渉の決裂は、即ミンダナオ全域を巻きこむ戦争だ、と言っていたから、これを聞いて人々が、100パーセントミンダナオ全域を巻きこむ大戦争が近々起こると考えたのも自然のなりゆきだった。

しかし、和平交渉を進めているアキノ政権の対応も迅速だった。情勢を把握したせい、数日後には、和平交渉の第二段階で滞っていた、資源の分配に関する合意を行い、調印したのだ。



日本からの古着を渡した



資源に関しては、政府側が半々を提案してのに対し、反政府側は7対3を提示していると聞いていたが、結論として天然ガス資源は半々、その他の農業資源などを7対3にすることで妥協したと聞いている。

**結局、戦争を起こす原因は、資源をどこが操作し利益を獲得するかという問題であることが、ここから見える。**

この点からも、世界の紛争の大きなテーマは、経済的金銭的な利益の問題であって、中東も含め、石油資源、鉱物資源、農業資源をいかに獲得するか、そして武器売却も含めていかに戦争景気を盛り上げて経済不況を克服す



私たちを護衛してくれている、反政府組織の兵士たち

るか、にかかっていると想像される。宗教問題などは、戦争を起こすための対立構造を作る目的で、意図的に操作されている手法にすぎないだろう。

手法に関して言うならば、テロ集団指定、反政府指定、また爆弾、誘拐事件なども、現地では戦争が起きている前に（意図的に起こされ）頻発し、マスコミに反政府勢力の作業と報道され、戦争気分を高めるための操作の一部であると、現地では言われている。

現地を知らず遠くから新聞やテレビで情報を得ている人々が信じこんでいる状況分析と、現地での情報や経験から推測する判断が、雲泥の差ほどある



マタラムに避難している子どもたち

理由だ。日本のような孤立した島国にすんでいると想像もできないだろうが、想像できないだけに、戦争気分が意図的におおられて、簡単に戦闘気分へのせられて、純粹に命がけで戦争に邁進するのではないかと、ミンダナオから見ていると不安になる時がある。こちらのように、戦闘が起これるの

近年、日本でもときどき報道されているように、日本政府も国際停戦監視団IMTなどを通してマレーシアやインドネシアと連携しつつ、積極的にミンダナオの反政府勢力であるMILFと接触し、フィリピン政府との間をとりもつつ

つ和平交渉を進めてきたこと。そしてミンダナオ子ども図書館も微力ながらその動きに貢献してきたことを、しばしばウェブサイトにこの季刊誌「ミンダナオの風」でも述べてきた。つい先日、前任の落合さんに代わってこられた新任の中川さんを、



避難民状態の子どもたち

イスラム自治区（ARMM）のサパカン村にご案内した。

この地域は、一般的には高度の危険地域に属し容易に入れないとされているリグアサン湿原のなかのイスラム集落なのだが、今回は、長年学校が新築されることを住民たちが願っていたサパカン集落にお連れした。

サパカン集落は、海に続くコタバト市への大通りとも呼べる大河プランギに隣接し、リグアサン大湿原への水路を背後に持ち、交通の要衝として重要な位置をしめている。

学校はすでにマルコス時代に建てられた歴史と実績を持ち、集落には家々もたち、子どもたちも多く、集落長をはじめとする住民や先生方の意識も高い。



サパカン集落には、ボートでしか行けない。IMTの中川さんと。

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているMCLのサイト

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

**ウェブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です!**



ミンダナオ子ども図書館のスカラー（奨学生）も多く、保育所も建てているのだが、なぜかこの小学校が、粗末なままに維持されてきていた。

（左の写真はMCLで建てた保育所。茨木ロータクトクラブが寄贈。左下の写真が、子どもたちが学んでいる校舎の一つ。背後は、広大なリグアサン湿原でワニもいる。）

この学校が新築されずに放置されてきた理由の一つは、洪水の影響を受けやすいこともあるだろうが、現地ではそれとなく司令官どうしの対立があったと聞いている。今はその司令官もいず、対立もないが……。



校舎の敷地内に建てられた、MCLの保育所

中川さんとは、初めての本格的な出会いだったが、南米やアフリカの体験も多く、地元根ざした建設的な支援を、

地元の特に貧しい人の立場に立ち、純粋な心で見えて考えていることがわかり、好感を持てた。それは、地元の人たちにも伝わった。

実は、この学校に関しては、地元から数年にわたり強い要請があり（要請される集落は多いのだが）なかでもここが、住民と集落長との和もしつかりしており、集落全体で教育に力をいれないからだった。

本音を言うと、イスラム自治区に、



サバカン集落の教室。校舎の向こうは、東アジア最大と言われるリグアサン湿原

建物の建設支援や物資支援を行うことは、よほどのことでない限りMCLでは躊躇している。行政体制そのものが機能しないに等しい中で、地元権力者

同士の抗争が頻繁に起こり、残念なことだが、過去の経緯を見ても、EUや日本政府によって支援されて建てられたコミュニティセンターなどの建物が、私物化されたり、資材の横流しが常態化しているからだ。

そのような理由で、ミンダナオ子ども図書館では、支援をスカラシップに集中させてきた。スカラシップならば建物と違って、権力者なりとも操作したり分捕ることはできないからだ。なかには、父親が殺されて困窮しているMILF、MNLFの司令官の子息もスカラーにとってはいるが、おおかたが孤児や貧困家庭の子たちで、地元の人々からも喜ばれている。

ただそうしたスカラーのいる多くの集落とのつきあいの中で、どうしてもやはりここには学校の建物が必要だ



集落長と握手するIMTの中川さん

あ、という場所が出てくる。その一つが、サバカン集落だった。

くわえてフィリピン駐在日本大使が、ブアラン小学校の開所式に出席した折、政府関係者から、「今年もMCLで、候補地の一つ出されたほうが良い」と声をかけられ、それならばサバカン集落が良いと選択した、

ところがその後、ソーシャルワーカーが、担当者にもメールを送ったところ、なぜか5年後にしてほしいと言われて、他のNGOのように、建設を通して人件費もとっていないし、見返りがあるわけでもないのに、集落の人々には可哀想だがあきらめてもらって、スカラシップ支援に集中しようと思っ



中川さんが来られて喜ぶ、サバカン集落の子どもたち





洪水で、国道沿いに避難した人々



洪水のなかを、学校に通う子どもたち



避難民救済に立ち向かう、MCLの子どもたち

ていた矢先。中川さんの提案で、MCLではなく、パガルガン市の開発局からの提案という形をとることにした。MCLにとっては、現地の特に子どもたちが喜んでくれればそれで十分。お手伝いにまわることにした。

戦闘のあいまにも、イスラム自治区はしほしほ洪水に見舞われた。水はしほしほ床上にまでたっし、人々は子どもをつれて、国道沿いの高台に避難しなければならなかった。

同じ避難民でも、洪水と戦争では深刻さがまったく異なる。洪水の場合は、長くても一週間ぐらいで水が引い

ていくが、戦争の場合は、数ヶ月、場合によっては一年以上にわたって避難民にならなければならず、恐怖の度合いも全く異なる。

ミンダナオ情勢に多少なりとも関心をむけ、理解するためには、避けて通ることができない道のようなので、ここで簡単にイスラム反政府組織の歴史を復習しておく。

(以下はウィキペディアからの抜粋)  
「モロ民族解放戦線 (Morong National Liberation Front 略称 MNLF) とは、イスラム教徒の政治組織。かつては分離独立を求めるフィリピンの反政府武装勢力だったが、1996年の和平協

定以降、イスラム教徒ミンダナオ自治地域 (ARMM) の政府として存続している。」

「モロ・イスラム解放戦線 (MNLF) は、1977年にモロ民族解放戦線 (MNLF) から分派・独立し、サラマト・ハシム (Salamat Hashim) が中部ミンダナオのマギンダナオ族やイスラム最大の部族であるマラナオ族などの支援を受けて、ミンダナオ島に結成したモロ人 (フィリピン・ムスリム) 解放組織である。

MNLF 議長のスル・ミサアリの妥協的穏健主義に反発して、MNLF を離脱して1981年、正式にモロ・イスラム解放戦線 (MILF) を名乗った。  
1987年、イスラム教徒ミンダナオ自治地域を設けるという政府の提案に

MNLF は同意するが、MILF は同調せず武装闘争を続けた。

1997年、政府とMILFの間で和平協定が調印されるが、2000年にジョセフ・エストラダ大統領はこれを破棄、MILF は対決してジハードを宣言、ミンダナオ島南部での遊撃戦のほか大都市圏での無差別爆弾テロを活発に展開した。

和平当時は約5千人の勢力であったが、自治に留まる和平結果に不満を持つMILF兵士や、指導者を失い崩壊状態となったアブ・サヤフ兵士が大挙としてMILFに合流し、現在では1万5千から2万人の兵力を有するに至った。」

つまり、MILFは、MNLFが政府と和平交渉をした結果を受協であると解釈し、それを不満として、あくまで自主独立をもとめて分離していったグループで、以降しだいに支持を集め拡大していく。

その範囲が、やがて天然ガスが豊富に埋蔵しているといわれているイスラム自治区に及ぶにしたがって、政府軍とMILF反政府軍の戦闘が激化、エストラダ大統領の時に、2000年の米比合同演習という実戦が起こり、アロヨ大統領に引き継がれて2001

郵便振替口座番号 00100 0 18057  
加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』  
購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願ひします。



年のテロリスト掃討作戦にエスカレートしていった。

僕は、そのときの避難民、とりわけ笑顔を失った子どもたちの様子に心を痛めてミンダナオ子ども図書館を始めたことは、前号でふれたとおりだ。

戦闘はその後も、2005年、2008年と、3年から5年おきに勃発し、ミンダナオ子ども図書館では、子どもたちと一緒に救済支援活動に走った。その時の写真や記録は、ウェブサイトに掲載されている。

その間2006年、日本では緒方貞子氏がJICAのトップになって以来、マレーシア、インドネシア、中東諸国も含めて国際停戦監視団（IMT）が形成され、フィリピン政府とモロイスラム解放戦線の間をとりもち、和平交渉が始まった。

和平交渉は、2008年に一度決裂し、80万人の避難民を出したが、そのときの戦争難民の状況は、僕が始めて避難民を見た2000年に比べると、悲惨さが少なかった。

規模が多少小さかったこと、期間も短かったこと、そして2000年から起こった比米合同演習（実戦）とそれに続くテロリスト掃討作戦の悲惨さの反省から、現地のライソン神父の提案

で、ピキット市を含む7町村の非戦地域をもうけた結果、そこに避難民が逃げこむことが出来たことが大きい。

交渉はいったん棚上げされたかたちだったが、その後、アキノ政権下で、再び交渉の土俵に乗ることが決まって、最近では楽観的なムードが、ミンダナオにも広がっていた。とりわけ、アキノ大統領は和平交渉に積極的な姿勢をとり、この政権が機能している間にモロイスラム解放戦線（MILF）と政府との間に和平調印がなされるだろうという、楽観ムードが広がっていた。今回の戦闘は、その矢先だっただけにショックだった。

6月マタラム市近郊で起きた戦闘は、モロイスラム解放戦線（MILF）



MCLが来たことを喜ぶ、マタラムのイスラムの子どもたち

とモロ民族解放戦線（MNLF）との衝突だった。

その後、7月にパイドプランギで起こった戦闘は、モロイスラム解放戦線（MILF）からの分離派、バンサモロイスラム自由戦士（BIF）と国軍の衝突であると（表向きには）言われているし報道されているのだが、実態はもう少し複雑だ。

しばしば僕は、MILFと政府の交渉を、MNLFやBIFとといった、イスラムの別の勢力がどのようにとらえ、場合によっては、MILFに対する独自の抵抗運動や分離運動を開始するのではないか、という懸念を述べてき



反政府勢力のサバカン集落の子どもたち

た。ちょうどMILFがMNLFから分離したように。

パイドプランギの戦闘は、アキノ大統領のサインで落ち着いたが、対岸のダトゥピアンでは、今も不穏な状況が続いている。

さらに、これを書いている時点で、マタラムで国軍を交えた戦闘が起こり、道路が一時閉鎖された。調査に行く予定だ。

ピキットのMNLFが支配するその山岳地域は、ことのほか貧しく、生活状況もよくないので、新たに3名の里子を採用した。そのうちの一人の少女は、父親が殺されている。

また、この戦闘からくる心労でスカラーのお父さんとMNLFの司令官だった人が亡くなった。

父が殺された少女の実家を調査しに村を訪ねると、司令官の父親を、先日病死で失った元スカラーの若者が、武器を身につけたまま案内してくれた。複雑な心境だった。



父を病死で失った元スカラー



野菜売りの子どもたちを追って

松居陽

前回は書いた通り、今季刊誌でも連載になっている、野菜売りの子どもたちをビデオカメラで追って、もう長くなる。

年頃になって、野菜売りに行きたがらないお姉ちゃんのギンギン、ケンカでは男の子にも負けない、暴れん坊のクリスティン、泣き虫で、甘えん坊のジョイジョイを中心に撮っている。

特にクリスティンは、僕になつてしままい(というか、僕をいじめるのが好きで)、今回の作品も、ドキュメンタリーというよりは、ホームビデオとい



うか、僕たちのユニークな関係を軸にストーリーを展開する。

初めてMCLから彼らの家に取材に行ったとき、前の晩お母さんが赤ちゃんを産んだと聞いて、クリスティンはまっしぐらに家へ駆けて行った。

生まれたてほやほやの赤ちゃんと、出産で疲れて、当分山菜をとりに行けないお母さん、お米が買えなくて、青いバナナで朝ご飯をすませる家族をみて、やる気になったようだ。

さっそく、子どもたちで山菜取りに出かけた。柵を潜り、ドールのバナナ農園に不法侵入する。日本の新聞紙に包まれてたバナナ林を抜け、灌漑でできた沼地にじゃぶじゃ



赤ちゃんとお母さんの初めでのキス

ぶ入り、フィリピン人にもほとんど知られていない現地の山菜を摘み取る。競争だよ、と誰が一番多くとれるか競い合うが、勝者は、いうまでもなくクリスティンだ。

土砂降りになり、楽しかった空気が、一気に冷えこむ。帰り道、農園をとぼとぼ歩くクリスティンは、もう顔を上げることもすらしなかった。それでも、お昼にカエルの煮物を食べ、気を取り直すと、野菜を売りに出かけた。

ここは、ドールの人たちが野菜を買ってくれるのよ、と連れて行ってくれた場所は、バナナのバッキング施設だった。ヘアネットをした親切なおばさんが、入って入って、と手招いている。

ヘアネットつけないで、いいのかな、と思いつつも入ってみて、驚いた。数十人のおばさんが、バナナを日本語で「スウィーティオ」と書かれた包装袋に詰めている。柵に目をやると、「高地栽培」と書かれた段ボール箱が、ぎっしり並べてある。

日給数百円だ、と言いつつも、楽しそうに仕事しているおばさんたちは、見ていて気持ちよかった。

野菜売りは、夜まで続く。

野菜の入ったたいきを、かわるがわる

頭にのせて、歩いて、歩いて、歩いて……冗談にならない苦勞に、しまいに麻痺してしまい、帰り道、静けさが漂う。家に着いたころは、もう9時をまわっていた。おやすみなさい……

今回の作品は、10月にMCLの報告会で日本を周るとき、上映する予定です。プロジェクトを持ち歩いてどこでも放映できるようにしていきますので、ご家庭から会場まで、どこへなりとご招待していただければ、喜んでお伺いします。

ミンダナオの子どもたちの現実を少しでも実感していただくことが、僕の願いです。苦しさや矛盾だけでなく、むしろそこにはしかない貴重な美しさ、力、そして人間らしさを感じていただけるはずですよ。



お金持ちの人に、野菜を買ってもらおう

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているMCLのサイト

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

ウェブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です!



## スカラシップ・里子支援



**sherwin baylon**



**shaina baylon**



**ahira baylon**



**princess rafael**



**ladyjane rafael**

小学校1年・2007年生・三つ子。イロongo族・クリスチャン  
父親が些細なことで殺されて母親は、保育園の先生をしながら  
6人の子を育てているが、生活は非常に厳しい

小学校4年生 イロongo族 小学5年生  
父親は殺された。母親は日雇い  
成績は良い



**jeahjoy.dayam**

高校1年・マノボ族  
両親はいるが貧しい  
成績は良い  
看護師になりたい



**sandel linao**

高校2年\*マノボ族  
母親はいなくなり  
父親は精神疾患  
MCLに住む



**Elmer Cabat**

高校1年・ピサヤ族  
両親はいるが、  
経済的に子どもを  
高校まではやれない



**jerehan.guimaludin**

高校1年・イスラム  
マギンダナオ族  
成績は非常に良い  
8人兄弟の7番目



**jessamae.ambis.**

高校一年・マノボ族  
山岳地で貧しい  
成績は良い  
8人兄弟の長女



**Janisa Pandian**

大学1年・イスラム  
戦闘の絶えない地域  
土地もなく貧しい  
成績は良い



**Rasmia Hashim**

大学1年 / イスラム  
戦闘で父親は死亡  
生活は厳しい  
成績は良い



**Japhet Merced**

大学1年・タガバワ族  
両親は死亡  
成績は良い  
3人兄弟はバラバラ



**Custjade Montecalvo**

大学1年 / クリスチャン  
父は死亡・母は不明  
苦勞して高校を卒業  
生まれつき足に傷害



**rosevina lumayon**

大学1年・マノボ族  
母は病気。貧しく  
コンピューターコー  
ス希望

### スカラシップ・里子支援の方法

郵便振替用紙に、「スカラシップ」または「里子」と書いて、支援額の一部を振り込んでいただければ、後日、現地から手紙やメールで支援の子を紹介させていただきます。学年、男女、境遇、年齢、イスラム教徒、キリスト教徒、先住民族など希望があればお書きください。出来るだけご希望に添う子を、紹介させていただきます。

サイトなどの紹介欄に載っている特定の「この子を支援したい」場合は、メールか振替用紙の通信欄に子どもの名前を書いてお送りください。子どもの紹介は、ウェブサイトの「スカラシップ・里子紹介サイトページ」にも順次、最新の情報を乗せていきます。入るのにパスワードが必要です。パスワードは、mindanao です。

奨学生の決定は先着順とさせていただきますので、サイトから「支援申し込み」をクリックして記入し、通信欄に希望の子の名前を書いてウェブメールしていただくのが一番早いと思います。折り返しスタッフから返事を送ります。

すでに支援者が決まった子の場合、別の子をご相談させていただきます。

ウェブサイトに、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。

「検索：ミンダナオ子ども図書館」<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

**郵便振替口座番号 00100 0 18057**

**加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』**

**購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願ひします。**

## 山菜売りの少女 6

前号からの続き

子どもたちは、屋根のある大きな市場の中をぐりぬけると道にでた。野菜を売っているお店がずらーっと並んでいる。

「山菜買ってくれない？」ギンギンがいうと。

「山菜なら、たくさん売れ残っているからなあ。」

「そんな、しなびた山菜、こごじや、だれも買わないよ。」

あんなにたくさん人がいるのに、ほ



とんどの人たちが、ふり向きもしない。ギンギンたちは、自分がひどく場違いなところに来てしまったような気がした。

ストリートチルドレン

市場をぬけて、ふたたび大通りに出ると、パン屋があった。おおせいの人

が、店のショーケースの前に立ってパンを買っている。

ギンギンたちは、パン屋の前に立ち止まると、できるだけ大きな声でさげ

んだ。

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「山菜買ってくださいなあー。」

でも、お店の人もお客さんも、パンの

良い香りにはひかれても、山菜のは

いったタライを頭にのせた、服もボロボロの子どもたちのことなど、見向きもしない。

パン屋のなかには、喫茶店もあって、おやつにパンやケーキといっしょに、コーラやジュースやアイスクリーム、ハロハロや煮こみうどんを食べながら、おしゃべりしているご婦人たちがいる。

「なかに入ってみようよ」クリスティンがいった。「なにか、買ってくれるかもしれないよ。」

ギンギンは、本当にだいじょうぶかなあ、と不安におもったけど、ぜんぜん売れないで帰るわけにはいかなかった。

母さんや妹や弟たちの、お腹をさせた顔を思い出していると、ゆうかななクリスティンが、開いている入り口から、喫茶店のなかにさっさと入っていった。それにひかれて、ジョイジョイとギンギンがつづいた。

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「山菜買ってくださいなあー。」

二度ほどさげんだとき、調理場から白い調理服を着た男が、手にオタマにぎって飛びだしてきた。

「きたないガキ。店のなかにはいるな！」

こんなところで、どこから採ってきたかわからない山菜を売られたりしたら、たまったもんじゃない！」

店のなかで、パンやコーヒー、アイスクリームやハロハロを食べたり、コーラやジュースをのんだり、煮こみうどんをすすっていた人たちは、いっせいに山菜売りの少女たちの方をみやった。

子どもたちは、あわてて店から出ようとした。けれども、頭に重たいタライをのせているので、さっさと動くことが出来ない。

うるうるしている子どもたちを見て、男はさらに声をはり上げて向かってきた。そして、大またでちかよってくる、タライを頭にのせた三人の子どもたちを、店のなかから、むりやりおしだそうとした。

驚いて、最初にクリスティンが、外に出ようとしたときのことだ。あわてたせいか、入り口のしきいにつまづいた。

「あつ！」

声を上げたのと同時に、ゆっくりと体が倒れ、頭にのせていた山菜のタライががたむき、手からはなれていく。店のなかにいた何人かが、キャーとさげんだ。次のしゅんかん、クリスティンは、だれかに抱きかかえられた。

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているMCLのサイト

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

ウェブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です!





「山菜が落ちる！」

クリスティンがさげんだとき、まわりで男の子たちの声でした。

「だじょうぶ。受け止めたよ！」

クリスティンが顔を上げて見ると、自分より大きな男の子が、クリスティンをだきとめていた。

山菜の入ったタライも、別の男の子たちがかかえている。ひっくり返って落ちる直前に、受けとったにちがいない。

ギンギンとジョイジョイも、あわてて店から外に出た。店の男は、出口に立つと、さげんだ。

「きたないガキども！」

店の前から立ち去れ！」

男の子たちは、山菜売りの少女たちを守るように取り囲むと、店の男に向かって、両手を耳のそばに立てて舌ペ口を出してあっかんべーをしたり、滑稽な顔をして馬鹿踊りをしたりし始めた。

よく見ると男の子たちは、ボロボロの破れた服を着た、七人のストリートチルドレンたちだった。

調理服の男は、顔をまっ赤にして、オタマを左手に持ちかえると、売り台にのっているパンを、石のかわりにつかんで投げようとした。

すると、ストリートチルドレンたちは、口をいっぱいに開けて、パンをここに投げこんでほしいと言わんばかりに、指で自分の口をさして踊り始めた。周囲にいる人々が、さすがに大笑いし始めると、男はきまりわるそうに、

「パン屋にはなあ、衛生規定つてものがあんだ！」と捨てゼリフをはいて、店のなかに引っこんでいった。

「だじょうぶ？」

クリスティンを抱きかかえた、大柄な少年がいった。

「ありがとう、助けてくれて。」

クリスティンが、答えると、少年は、顔を首筋までまっ赤にして頭をかいた。他の子たちが、はやし立てた。



一人の子が言った。

「山菜売り、てつだつてやろうよ。」

「OK。レッツゴー。」

ギンギンとクリスティンとジョイジョイは、とつぜんひよんなことから友だちになった、七人のストリートチルドレンたちといっしょに、町中を歩きはじめた。

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「山菜買ってくださいなあー！」

ギンギンたちがいうと、七人の男の子たちが、大声でさげぶ。

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「山菜買ってくださいなあー！」

シンカマス売りのお母さん

市場に入る角の道までくると、そこにかんたんな台をだして、小さな娘といっしょにシンカマス(砂糖大根)を売っている貧しいお母さんがいた。

たった今起こったことを、遠くから見ている、ちよつと心を痛めたこともあって、そのお母さんは、子どもたちに声をかけた。

「その山菜、少しだったら、買ってあげるよ。」

ここに置いておいたら、売れるかもしれないしね。」

「ありがとう。」

「二束づつで、わずかだけれど、ごめんね。いくら？」

「カンコン二束で10ペソ、タクワイ二袋で20ペソ、パコパコ二束で10ペソ、ぜんぶで40ペソ。」

お母さんも貧しいらしく、ポケットの財布からななしのお金をだすと、山菜を受けとって売り台に置いてくれた。

「あんたたち、マノボ族みたいだけれど、学校にもいってないようね。」

お母さんはいった。

(つづく)

電話番号：080-4423-2998 (日本から現地直通)

09219603640 (Tomo Matsui Cell phone in Philippines)

日本事務局；Fax 専用 093-473-7710 (内容は本部に転送されます)

メール：mclstaff@zar.att.ne.jp(松居友)

# Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない  
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも  
はるかに美しいと感じるときだってある。  
けれども、どうにもならないのが、  
一日三食食べられないときと、  
お金が無くて学校に行けないとき  
病気になっても病院に行けないとき・・・



## ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）**  
直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった全ての方々には、  
年四回、4月、6月、8月、10月、12月に季刊誌『ミンダナオの風』をお送りしています。
- 2、大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・・年額60000円（月額5000円）**  
振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、  
年5回の季刊誌に同封して、本人からの手紙、4月スナップ写真、6月に成績表  
8月にプロフィール、10月は機関誌のみ、12月にクリスマスカードなどが届きます。  
新規奨学生の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。  
文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。
- 3、里子支援（小学生）・・・年額30000円（月額2500円）**  
振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、季刊誌に同封して、  
4月にスナップ写真、6月は機関誌のみ、8月にプロフィール、12月にクリスマスカード  
が届きます。新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。  
文通やプレゼントも可能ですが、隔月の学用品と一緒に僻地に届けて返事をもらうため  
返事は機関誌に同封する形で半年ほど後になる可能性があります。訪問の際は自宅にご案内。
- 4、保育所・下宿小屋建設支援・・・40万円（資材高騰と建設後の修理代を加えました）**  
振り込み用紙の通信欄に「保育所」または「下宿小屋」と書いて振り込んでいただければ、  
季刊誌をお送りすると同時に、10月には毎年現地の保育所や下宿小屋の写真報告をお届け。  
開所式参加や訪問も可能です。
- 5、植林環境支援・・・6万円（ゴムの木600本、1ヘクタール、現地作業代を加えました）**  
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。
- 6、古着等の物資支援・・・郵送およびフィリピン宅配フォーレックスが便利です。**  
Forex フリーダイヤル：0120-77-3583,3584

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

**ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057：加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』**

（インターネットバンキングも可能です） ■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900  
■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 ○一九店（ゼロイチキユウ店） ■口座番号 0018057

スカラシップ・里親に関する質問、または現地訪問その他に関する問合せは、メールが最適です

[mclstaff@zar.att.ne.jp](mailto:mclstaff@zar.att.ne.jp)（松居友メール）

電話番号：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）

日本事務局；Fax 専用 093-473-7710（内容は本部に転送されます）

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines